

令和4年度
北九州市立看護専門学校
社会人入学試験

国語問題用紙

(9:00 ~ 9:50 50分)

<注意事項>

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 2 この問題冊子には、問題用紙が16ページまであります。
- 3 落丁・乱丁のある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名・フリガナを忘れずに記入してください。
- 5 問題冊子は回収します。

受験番号

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問8）に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

一九九〇年前半に、北米ではアメリカ、カナダ、メキシコの間で NAFTA（自由貿易協定）が締結されました。それによつて三国間で農作物が自由に行き来するようになつた。そのとき、メキシコの国産トウモロコシより「A」な農業をしているアメリカ産トウモロコシのほうがずっと安価でした。当然ながら、メキシコの消費者たちは自国産を食べるのをやめて、アメリカ産のトウモロコシを食べるようになりました。結果的に、メキシコのトウモロコシ農家は壊滅的な打撃を受けました。でも、メキシコの消費者はそんなことを気にしなかつた。アメリカ産のほうが安いですから。自国のトウモロコシ農家が倒産したのは、經營努力が足りなかつたからで、そういう怠惰な農家が淘汰されて市場から退場するのは A なことなんだ、と。そういう話をメキシコの人たちは受け入れた。ところが、そのあと、アメリカでトウモロコシバイオマス燃料の原料とするテクノロジーが開発されると、トウモロコシの市場価格が一気に高騰した。すると、今度はメキシコ人たちは主食であるトウモロコシを買えなくなつてしまつた。でも、もう国内には国民全体に主食を供給できるほどのトウモロコシ農家はなくなつていた。主食の供給をマーケットに委ねたせいで、メキシコは伝統的食文化の崩壊の危機に直面したのです。このエピソードは、食文化は市場に委ねてはいけないという教訓を僕たちに教えてくれていると思います。

今日の「島のむらマルシェ」もまた、食文化について考える場なのだと思いますが、食文化の本質は一つしかありません。それは、共同体のメンバーを飢えさせないこと、それに尽くされます。

飢餓をいかに回避するかが食文化の基本です。僕たちは農業について語るときにはビジネスの用語を使い、食文化について語るときは文学的なシユウジを駆使する。農業と食文化について語る文章の中に「飢餓」というようなエッジの立つた単語はふつう出できません。でも、農業と食文化について語るときは、それが飢餓をいかに回避するかという人類史的な努力の成果だつたという事実を忘れてはいけないと思います。人類の食文化は飢餓ベースです。餓死者を出さないこと、そのためには人類は食文化を発展させてきたのです。

食文化は二つの工夫に集約されます。

一つは不可、食物の可食化です。そのままで食えないものをなんとかえるようにする。そのためには驚異的な努力を積み重ねてきました。叩いてみる、焼いてみる、蒸してみる、燻蒸してみる、挽いてみる、水に晒してみる……あらゆる動植物について、思いつくかぎりの調理法を試すことによって、「こんなもの絶対に食べられない」というものをなんとか可食化してきた。これが食文化の輝

かしい成果です。

もうひとつは食習慣の差別化です。隣接する集団と自分たちの集団の主食を「ずらした」のです。同じものを食べない。隣がバナナを主食にするなら、自分たちはイモを食べる。向こうが小麦なら、こちらは米を食べる。集団がそれぞれ主食のタイプをずらしてゆくことで、単一の農作物への需要の集中を回避させた。こうしておくと、たとえば、ある植物が病虫害や異常気象のせいで壊滅的な被害に遭つても、それを主食としていない集団にとっては直接的な影響はない。主食が採れなくなつた集団でも、「 甲 」となればイモでもバナナでも豆でも食べる。

すべての集団が同じ植物を主食としていたら、その種が不作となつたら、全集団が同時的に飢餓の危機に瀕します。当然、主食の奪い合いが始まる。それを防ぐためには食習慣をずらすのがもつとも確実です。

調味料というのもそうです。あれは欲望の集中を防ぐための工夫です。どの集団も調味料には発酵物質を使います。要するに「腐ったもの」です。それを自分たちの主食の上にぶちまける。その調味料を使わない集団から見れば「腐敗したものを見てる」ようにしか見えない。手を出す気になれない。でも、これはすばらしい工夫なわけです。自分たちの食糧を安定的に確保しようと思ったら、周りの集団から「あいつらはゴミを食つている」と思われるのが一番安全だからです。他の集団から羨望されないものを食べているかぎり、奪われる気づかいはない。

主食を「ずらす」のも、調味料に「腐ったもの」を使うのも、いずれも人類が飢餓を回避するために思いついた生活の知恵です。食文化は飢餓ベースだというのはそういう意味です。人々が欲望するものをできるだけブン⁽¹⁾サンして、欲望の対象が一つに集中しないようにする。食文化というのはそういうシリアルスなものです。食糧をどうやって安定的に供給するか、供給が止まつたときにはどうやって食資源の奪い合いという破局的事態を回避するか、食文化というのはそのために作られた文明的な仕組みなんです。

当然、農業もそのような食文化の歴史の中に置いて考察しなければなりません。人類七万年の「飢餓を回避する努力」の成果として農業があるからです。どんなことがあっても安定的・継続的に食糧を供給できること。それが農業のアルファであり、オメガです。だから、单一栽培を嫌つて、多様な作物を⁽²⁾コウサクするのは当然なのです。ある農作物が病虫害で全滅しても、それと似たような栄養素を持つている作物が被害を受けずに育つていれば、飢餓は回避できる。農業における多様性の確保というのは集団存続のための基本です。人類の知恵が詰まっている。

ですから、食文化のリテラシーが高い人というのは「何でも食える」人のことです。世界のすべての食文化に等しくオープンマインドに接することのできる人です。他の人が「こんなもの食えるか！」と言つて棄ててしまうものを「おお、美味しい」と言つてぱくぱく食べられる人が飢餓にもつとも強い。親たちが子どもに「好き嫌いをしないで、何でも出されたものは食べなさい」というさくしつけたのは、別に□なことを言つていたわけではありません。そのような食文化リテラシーの高い個体のほうが飢餓を生き延びるチャンスがあるから、そう教えていたのです。子どもたちが飢餓的状況を生き延びられるように、「何でも食べられる能力」を育成していたのです。

ですから、農業は、どうやつても市場のロジックとは合いません。市場は「たくさん金が欲しい」という原理だけで動いています。「どれだけあれば足りるか」ということは問題になりません。世界の超フ^(④)ニウ層の中には一〇〇〇億ドルというような天文学的な個人資産を持っている人たちがいます。毎日一億円使つても使い切るまでに三百年かかる。それでも、彼らはもっと金が欲しくて新しいビジネスモデルを開発したり、M&Aを繰り返したりしている。「足りる」ということがないのです。

農業は違います。

X

だから、はつきり言い切れますけれど、^③農業を市場原理に従わせることはできません。農業は貨幣よりも市場よりも株式会社よりも古い。株式会社というシステムが普及したのは十八世紀の話です。まだ二三百五十年くらいの歴史しか持つていらないシステムが、少なくとも二万三千年前から存在する生産活動に対して「そんなやり方じやダメだ」と文句を言うとしたら、それは文句を言うほうが筋違いなのです。

それでも、現代社会には市場経渓という仕組みが存在しており、グローバル資本主義の世界で僕たちは生きているわけですから、ある程度そういうものと折り合いをつけなければならない。でも、それはあくまで「折り合う」ことであって、市場経済やグローバル資本主義のルールに「従う」ということじやない。

農業と市場は原理が違います。無限に貨幣が欲しいという人たちの欲望で動いている市場と、太陽の恵み、大地の恵み、水の恵みを受けてコウサクし、育った果実を生身の人間が飢えないために享受するという農業は存立する原理が違います。だから、市場は農業の原理が理解できないし、農業は市場の原理についてゆけない。そんなの当たり前なんです。できるのは「もともと食い合わせの悪いもの同士の折り合いをつける」ことだけなんです。でも、それはあくまで暫定的な「折り合い」であって、本質的には市場と農業は「噛み合わない」ということを忘れるべきではないと思います。

今日日本の農業政策が破綻しているのは、市場と農業という両立しがたいものを「両立できるはずだ」という前提に立つて、「正解」を必

死で探しているからです。市場と農業が安定的に、ワイン＝ワインの関係で共生できるような「落としどころ」を探しているけれど、そんなものは存在しません。

食い合わせが悪いものを無理やり食い合わせようとするからマサツが起きる。こういう原理の違うものを折り合わせようとしたら、最終的には生身の人間に出てきてもらうしかない。自然と文明という食い合わせの悪いものを里山が間に入って共生させているように、市場と農業という食い合わせの悪いものを共生させるためには「中に立つて調整する」ものが需要です。

それは個人の身体しかないと僕は思っています。その二つの領域の間にねじ込んでいって、なんとか折り合いをつけさせられるのは可塑性のある生身の身体だけです。身体だけが「あちらが立てばこちらが立たず」という矛盾に耐えて二つの異なる原理を仲立ちをすることができる。

(注) 島のむらマルシェ——周防大島で開催されている生産者直売市。

内田樹たつる『日本習合論』より

問1 二重傍線部⑦～⑩の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

⑦ シュウジ

- ① シュウエキがあがる
② キョウシュウの念に駆られる
③ シュウトク物を届ける
④ 屋根をシュウリする
⑤ シュウネン深い人である

①

フユウ

②

コウサク

①

ブンサン

⑤ ④ ③ ② ①

乗客をユウドウする
諸国をマンユウする
ユウゼンと構える
ユウダイな眺めである
心にヨユウを持つ

⑤ ④ ③ ② ①

セイコウ雨読の日々
ギコウを凝らした絵
契約がコウリョクを失う
コウゴに意見を述べる
ケイコウを分析する

⑤ ④ ③ ② ①

大企業のサンカに入る
高く買わせるサンダンをする
旅行で派手にサンザイする
市場をサンショクする
国民にサンビを問う

④ マサツ

野外でサツエイする

サツカショウの処置をする

サツキだつた雰囲気

人事をサツシンする

患者をシンサツする

⑤ ④ ③ ② ①

問2 空欄 A 、 B

号で答えなさい。

を補うのに、最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番

- A ① 合理的 ② 一般的 ③ 画期的 ④ 現実的 ⑤ 典型的
B ① 情緒的 ② 逆説的 ③ 理知的 ④ 理論的 ⑤ 道徳的

問3 空欄 甲

においてはまる最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 昨日の敵は今日の友
② 木に縁りて魚を求む
③ 背に腹は代えられない
④ 毒を食らわば皿まで
⑤ 祸を転じて福となす

問4 傍線部1「NAFTA（自由貿易協定）が締結されました」とあるが、その結果、どうなったのか。その説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 金を儲けるという原理だけで動く市場経済に従つたメキシコは、伝統的な食文化が崩壊する事態に直面することになった。
- ② 安価な農作物を大量に購入ができ、飢える心配がなくなったメキシコだったが、食文化について考へることもなくなった。
- ③ 主食の供給を市場に委ねることになったメキシコは、自國の農家の倒産を招き、市場から撤退させてしまった。
- ④ 自国の農家が作るよりも安い他国（アメリカ）の農家が作る農産物を買うようになつたメキシコは、食料自給率が低下することになった。
- ⑤ アメリカ、カナダ、メキシコの間で農作物の行き来が自由になり、消費者はより安価な農作物を購入できるようになった。

問5 傍線部2「食習慣の差別化」とあるが、なぜこのようなことが起こるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 植物が病害虫の被害や異常気象の被害などにあつたりすることがなくなると、人類が飢えることを回避できるため。
- ② たとえ食べるものがなくなつたとしても、何でも食べることができるようになれば、人類が飢えることを回避できるため。
- ③ 自由貿易協定を締結し、農作物が世界中を制限なく行き来することができるようになると、人類が飢えることを回避できるため。
- ④ 隣接する集団の主食を異なるものにするなどして、需要や欲望の集中を防ぐと、人類が飢えることを回避できるため。
- ⑤ 品種改良や技術開発を行うことで、食糧を安定的に供給することができるようになると、人類が飢えることを回避できるため。

問6 空欄

X

に入る〔1〕～〔5〕の文を正しく並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

〔1〕それ以上作つてもしようがない。

〔2〕でも、金が欲しいという人には上限がない。

〔3〕生身の人間の消化器がベースだからです。

〔4〕「需要に上限のある生産活動」を「需要に上限がないシステム」によつて制御する」とはできません。

〔5〕食べる人間がいて、その胃袋に詰め込める量の算術的総和が「必要な農作物」の上限です。

- ① [2] → [4] → [5] → [3] → [1] ② [3] → [2] → [1] → [5] → [4]
③ [3] → [4] → [5] → [1] → [2] ④ [5] → [1] → [3] → [2] → [4]
⑤ [5] → [2] → [4] → [3] → [1]

問7 傍線部3

「農業を市場原理に従わせることはできません」とあるが、どのようなことが必要であると筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 市場と農業という両立しがたいものを両立させようと無理をすることなく、それぞれのルールに従うことが必要である。
② 市場も農業もどちらも相手のルールを自己のなかに取り入れることで、自己変革して相手と妥協することが必要である。
③ 柔軟に変化することができる生身の身体を介して、市場と農業という仕組みが異なる両者が共生することが必要である。
④ 市場と農業は原理が異なるため、相手を理解できないことを前提に、自己の力によって調整を試みることが必要である。
⑤ 人類の知恵をいかんなく發揮して、市場と農業という異なる原理を持つている二つを一体化することが必要である。

問8 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 市場経済やグローバル資本主義のルールに従っていると、飢餓が発生するので、ここから脱しなければならない。
- ② 貨幣や市場や株式会社よりも農業の方が、より効率的な仕組みを持っていたため、古くから存在しているのである。
- ③ 個人が欲しいと思う金額には限度があり、「足りる」ということがあるが、市場にはそのように満足することがない。
- ④ 人間の欲望には限りがなく、欲望に任せて食べていると、それに対応しようとする農業は際限なく拡大してしまう。
- ⑤ 食文化のリテラシーが高い「何でも食える」人というのは、淘汰されることなく生き延びる可能性が高い人である。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問8）に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

まず、赤ちゃんのことを考えてみましよう。

生まれたばかりの赤ちゃんは、母親に抱きしめられ、世話をされ、無条件の愛を注がれています。特に何ができるわけでもないし、むしろ何もできないので、親は懸命に世話をし続けています。それは、赤ちゃんが「ただそこにいるだけで価値のある存在」と見なされているからです。これこそ人間が最初に経験する承認であり、愛情にもとづいた親和的承認なのです。

親和的承認は、自分の気持ちが相手に理解されたとき、相手が共感的に対応してくれたときに感じられます。自分の感情は本音を示しているので、その感情を受け入れられ、共感されると、あるがままの自分が受け入れられた、と感じられるからです。それは、存在そのものが受容されたよろこびであり、 A な「存在の承認」の体験でもあるのです。

もちろん、生まれたばかりの赤ちゃんはまだ自分を意識できないので、認められているという感覚はありません。認められるよろこびは認められる自己が意識されてこそ感じられるはずですから、自己像の形成されていない段階では承認欲望もないし、認められることの充足感もないのです。それどころか、自分の感情さえわかつてはいられないでしまう。

あ 、母親は赤ちゃんに対して、まるで赤ちゃんの感情や意志を理解しているかのように共感的に反応し、言葉がわかるかのように話しかけます。この共感的な対応によって、赤ちゃんは自らの感情を理解し、自己を意識はじめるのです。

たとえば、母親の姿が見えずに泣き叫ぶ赤ちゃんは、自分の不快な気分が「寂しさ」であることを知りません。漠然とした不快感はあっても、その原因はわからないのです。しかし母親が戻ってきて、「ごめんね、寂しかったね」と駆け寄り、愛情をこめて抱きしめたとしたら、どうなるでしょうか。このとき、母親は赤ちゃんの気持ちに共感し、まるで自分のことのように寂しさを感じているでしょう。その感情は赤ちゃんにも感じ取られ、より明確になってしまいます。い 、母親がその感情を「寂しい」という言葉で表現したことで、漠然とした不快感の正体が徐々にわかつてくるのです。

このような経験が繰り返されることで、赤ちゃんは成長するにしたがって、ある種の不快な感情が「寂しさ」であることを理解し、自覚できるようになっていきます。そうなれば、母親がいなくて寂しい気持ちが生じたときでも、漠然とした不快感から泣き叫ぶのではなく、寂しさを自覚し、寂しさを訴えるかのように泣くはずです。

こうして自分の感情に気づく力が培われます。自らの感情を意識し、自覚することを「自己了解」と呼ぶなら、母親のように赤ちゃんの直接世話をする養育者が親和的承認を与えることで、自己了解の力が形成されはじめるのです。それは頭で考えた自己理解とはちがい、その程度、1自分の気持ちに気づく力と言えるでしょう。

哲学者のハイデガーは、「了解するはたらきはそれらすべての次元にわたっていつもそれぞれの possibilityを探ろうとしている」(『存在と時間』)と述べています。ある気分に気づき、これを受けとめること(了解)は、これから自分がどうしたいのか、どうすべきなのか、という可能性を探すことにつながっているのです。

これは、人間が気分を了解しつつ、可能性を目がける存在であることを意味します。言い換えれば、人間は自己了解(気分の了解)によつて、自分自身の本音を深いところで理解し、それに応じて行動を選び取つているのです。

普段の行動を思い浮かべてみてください。いやいやはじめた仕事でも、やつていてるうちにワクワクした気分になれば、もつと続けたいと思うでしょう。逆にイライラした気分になつてくれば、もうやめたい、という自分の本音に気づくはずです。気分、感情は、いま自分が何を望んでいるのか、どうすべきなのかを示しています。そこから私たちは行動を決めているのです。

気分に気づくこと(感情の自覚)、つまり自己了解することには個人差があります。自己了解があまりできない人は、感情に左右されやすく、自分の気持ちをコントロールすることがうまくできませんし、ひどい場合には、自分が何を感じているのか、それさえもわからなくなる人もいます。こうなると、自由に生きることもできません。自由とは「したいことができる」ときに感じられるので、自分の「したい」ことがわからなければ、自由を感じることはできないのです。

う、子どもに対する大人(特に親)の親和的承認、共感的な対応は、子どもが自由に生きていくために、きわめて重要な意味をもつていています。それは自由にとって不可欠な、自己了解の力を形成するからです。

多くの人は程度の差はあっても自己了解の力があり、自らの心の動きを察知し、自分の感情に気づくことができます。それは生まれつきそなわった能力というわけではありません。最初は母親が、あるいは父親や祖父母、保育士が、とにかく愛情をもつて接してくれた大人が、自分の感情をていねいに受け止めてくれたからこそ、培われた力なのです。

こうした共感的な対応、親和的承認は、赤ちゃん時代だけでなく、幼児期全体をとおして少しづつ進展するプロセスであり、2児童期、思春期においても必要になります。

親和的承認が満たされるからこそ、子どもは安心して行動し、集団的承認を求める段階に無理なく進むことができるし、自信をもつて、自分のやりたいことを積極的に行う主体性も築かれます。あるがままの存在が受容される「存在の承認」があつてこそ、主体的な行動が可能となり、「行為の承認」を得ようとはじめるのです。

とはいって、感情を受けとめ、共感的に対応する親和的承認が最も必要な時期は、やはり幼児期だと思います。この承認がなければ、子どもは自己意識に目覚めることさえ難しくなるからです。

幼い子どもは、まだ自分の感情を自分のものとして自覚する力が弱く、しばしば自分と他人の感情を混同してしまいます。母親が悲しそうな顔をしていれば、たちまち悲しい気分になり、泣き出してしまうでしょう。〔甲〕が、最初のうちは相手の感情をわかるというより、ほとんど自分自身の悲しみとして感じています。相手の感情と自分の感情を混同している、と言つてもよいかかもしれません。

しかし、親和的承認と共感的な対応によって、少しづつ、自分の感情を自分のものとして自覚できるようになり、同時に自分と他人の感情を区別できるようになります。つまり、そのような感情をもつた主体として自分を捉え、それが自己像の核となっていくのです。

母親は赤ちゃんが生まれてから一年ぐらいは、かなり没頭して育児に集中していますから、通常、赤ちゃんの親和的承認の欲求に十分応えることができます。あまりに弱々しい姿で誕生したわが子に対し、自分が守らねばならない、という強い責任感と不安を抱くため、赤ちゃんのわずかな異変にも気づき、即座に対応するようになるからです。

もつとも、こうした対応は大変な疲労をともなうため、一年ぐらいして育児に慣れ、赤ちゃんもしつかりしてきた段階で、母親は育児への没頭状態から脱け出し、³「完全な母親」から「ほどよい母親」に移行する、と精神分析医のウイニコットは言っています。別に手を抜くようになるわけではありませんが、完全に世話をするのではなく、度が過ぎない程度になる、ということです。

母親の対応が完璧でなくなれば、幼児は欲求不満を感じるようになるのではないか、と思うかもしれません。そのとおりですが、これは幼児が現実を認識する上で必要なプロセスなのです。なぜなら、もし母親がいつまでも完璧に対応し、幼児の不快や不満を即座に取り除くなら、幼児はすべてが〔B〕に快適になるという錯覚を抱いたまま、自分で状況を変えようとはしないでしょう。外の世界に働きかける必要性を感じないため、現実をしつかり認識できなくなり、行動を起こす主体性もなかなか形成されません。

そもそも一年ぐらいたてば、幼児はだんだん、いろんなことができるようになります。〔I〕手足も自由に動くようになるし、歩きはじめたり、物を自由にいじることもできるようになります。〔II〕さまざまの能力が開花し、「できる」ことが増えるのです。〔III〕幼児はこの自由な

感覺に嬉々とし、いかにも楽しげに、自由に身體を動かすようになります。【IV】

したがつて、いつまでも完璧に世話をしなくても、できることは少しづつさせるほうが、実は子どものためになるのです。【V】たいていの母親はこうした事情を知つてか知らずか、ごく自然に子どもの能力を引き出し、できることはさせるようにしているものです。

幼い子どもが身體を自由に操りはじめると、親は驚きに満ちた眼で「すごーい！」と声を出してよろこぶでしょうし、ほめたたえ、よしよしと抱きしめるでしょう。それに対して、幼児はここにこしながら、何度も同じことをしようしますが、その得意満面な様子は、「見て見て、すごいですよ！」とも言いたげです。これは身體の自由を得たよろこびというだけでなく、親にほめられたことによるよろこび、はじめて自分の行為が評価されたよろこびなのです。

こうして、幼児は自分の行為が認められる喜びを知ります。それは人間がはじめて経験する「行為の承認」なのです。

山竹伸一『ひとはなぜ「認められたい」のか——承認不安を生きる知恵』より

問1 空欄

A [] 、
B []

を補うのに、最も適當なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- A ① 倫理的 ② 現実的 ③ 原初的 ④ 一般的 ⑤ 合理的
B ① 制度的 ② 主体的 ③ 効率的 ④ 相對的 ⑤ 自動的

問2 空欄

あ ジ う

を補うのに、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① なぜなら ② しかも ③ したがって ④ しかし ⑤ むしろ

問3 空欄

甲

を補うのに、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① ある意味で、大人よりも感傷的であると言えます
② ある意味で、大人よりも共感しやすいと言えます
③ ある意味で、大人よりも純粹であると言えます
④ ある意味で、大人よりも気を回しやすいと言えます
⑤ ある意味で、大人よりも覚めていると言えます

問4

次の一文を挿入する場所として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

それは人間が最初に感じる自由の経験なのかもしれません。

- ① [I] ② [II] ③ [III] ④ [IV] ⑤ [V]

問5 傍線部1 「自分の気持ちに気づく力」とあるが、なぜこのような力を形成することができるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 親が自分の気持ちを赤ちゃんに伝えていると、それが赤ちゃんにも自然と伝わり、感情というものを理解できるようになるから。
- ② 赤ちゃんを懸命に世話を親の思いを受け取り、それに対応することによって、感情が自分の中に輪郭を持つようになるから。
- ③ 言葉以外で表現するしかない赤ちゃんの感情を親が共感的に理解し、言葉で伝えると、赤ちゃんは言葉を話せるようになるから。
- ④ あるがままの自分を受け入れて欲しいと生得的に思う赤ちゃんを、親が承認することで赤ちゃんは自己了解するようになるから。
- ⑤ 親によって自らを無条件に承認してもらうことで、赤ちゃんは自らの感情を理解し、自己を意識することができるようになるから。

問6 傍線部2 「児童期、思春期においても必要になります」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 自己を初めて了解できる児童期、思春期においては、自分の気持ちをコントロールしながら、行動することが求められているから。
- ② 自分のしたいことが明確に形成される児童期、思春期においては、親の承認や協力などが今までよりも重要になつてくるから。
- ③ 児童期、思春期においては、自らの意志や判断に基づいて行動することや、集団的承認を得たりすることが必要になつてくるから。
- ④ 親の感情と自分の感情を区別できる児童期、思春期においては、自分の感情を積極的に表現したいという思いが募つてくるから。
- ⑤ 大人と異なり気分や感情が行動を決める児童期、思春期においては、自分の気分や感情が分からぬとうまく行動できないから。

問7 傍線部3 「『完全な母親』から『ほどよい母親』に移行する」とあるが、この移行は幼児にどのような影響を与えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 今までとは異なり自分の思うようにならない現実に幼児は直面し、自暴自棄になる。
- ② 現実は決して快適なものではないと幼児は認識して、主体的に行動を起こすようになる。
- ③ 母親が感じている育児の大変さを幼児は理解し、自分でできることは自分でできるようになる。
- ④ 母親の制約がなくなり、自由に身体を動かすことに幼児は喜びを覚え、万能感を持つようになる。
- ⑤ 母親による親和的承認と共感的な対応によつて、幼児は自己を了解することができるようになる。

問8 筆者の考え方と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 母親は赤ちゃんが生まれてから一年ぐらいはうれしさから育児に没頭するが、その後は育児をなおざりにし始めるようになる。
- ② 完璧な育児を行うことに疲れた母親は意図的にそのような育児を辞めるが、それが結果的に幼児の主体性を引き出すようになる。
- ③ 自己了解により自分がこれからどのように行動すべきなのかを自覚でき、次の行動を理性的に導くことができるようになる。
- ④ 自分の感情と相手の感情を混同することは児童期、思春期を経てなくなつていき、気分や感情により行動を決めるようになる。
- ⑤ 親和的承認は、子どもに「存在の承認」をもたらし、その安心感から、自分がしたいと思うことを積極的にできるようになる。